

昭和14年1月1日（日）

巖夫婦改まって念頭の祝儀を陳ぶべく、揃って余の部屋に来る。今日ばかりは巖の羽織をはおり、神様に祝詞を捧ぐ。曇り、暖かなり。屠蘇頂く、雑煮も頂く。十時両児を連れ巖と神詣で、闇無し浜より公園地に向かわせ、余は途中より分岐出局す。永江氏郵便に擔当、余は帳簿類を刷新す。二水兵あり、三重県の飛行隊まで行く旅費なしとて当惑し居る。余は責任に於いて、四日交付したることとし、各二十五円即時払戻しを断行す。三時帰宅。雑煮を食べ四時出発。下関まで立ち二往復として求め出発。下関に至り駅にて半時待つ。降雨、外出不可能。七時三十分連絡船開札、直に到着、ホームに至れば時刻違えず、七時三十分急行到着。一々物色すれど夫れらしき者見当たらず。連絡船を一巡し次のホームに至る。廊下に於いて偶然発見、連れ立って門司に至りて大分行き列車に投ず。雨車窓を叩く、十分遅れにて出発せしも、途中にて殆ど定時に取返したり。中津駅に停車の頃は居眠り居たるが、夫れと気づき慌てて下車す。巖迎えに来て居る。雨は上がり徒歩帰宅す。門司にて弁当30、蜜柑20、曹達水15を求めたるも、弁当は食わず。曹達水のコップと匙とを棄つるに忍びず、残りの蜜柑と共に包みも持来る。入浴後十一時寝床。愛子は郷里の誰彼に就いて質しては悦に入り、盡きる処を知らざる如し。荷物中には実家よりの味噌漬け、其の他沢山ある由なり。

昭和14年1月2日（月）

快晴、朝八時の汽車が午後一時に延伸させらる。巖駅に荷物を受取りに行く。此の間余両児を連れ神社に詣で、約半時間光子をも同伴出かく。戻れば巖梱包を解き居る。

味噌漬け、納豆、静子等、駒次より餅来る。青豆一升、此れは余の分、此の外留屋氏より九重を頂く。塩川よりの此等品物の幾分を分配され、荷物は可なり多くなりぬ。糯米は旧曆中津餅搗きに搗いて貰ふこととし、青豆も大部分差し置く。一時二十分前澄子と出立。汽車十五分遅れ満員の姿、澄子と立ち往生。夫れでも澄子は途中より座席に着、次いで余も着席し得たり。入営兵士多数に由る。約三十分遅れ下り列車小倉に待居る。汽缶車に近く座席あり、漸く立ち往生を免る。爰に初めて新聞を見て居る内、居睡りす。折尾にて満員、隣客余の背中にもたれ掛かり眠る。博多駅に至る間緩和されず。混雑の俣到着、三十分弱遅れ正五時。南新町より徒歩、五時半飯宅。六時半夕食。中尾貢氏より焼き海苔二缶、二郎より納豆及び菓子、三谷よりも納豆送り来る。秀夫夜来たり十時還る。

昭和14年1月3日（火）

朝曇り、快晴。久子朝食を食べず出発。十時道子等外出、四時十分還る。毎食雑煮、午後より時に曇り。澄子人混みにて何も買わず還りし由。余の為に木村屋のパンを（ピーナツ）三個求め来る。之を頂きたる外、雑煮をも頂く。此日新聞紙は休刊。午後より次第に曇る。九時寢床。

昭和14年1月4日（水）

夜半より降雨、夜明くるも猶歇まず。今朝も久子早く出掛く。六時半久子仕度して居る間に下に行き、「朝の行事」を済ます。今朝新聞配達。午後0時臨時ニュースにて、近衛首相全閣僚の辞表を集め、闕下（けっか）に捧提

骸骨を請ひ奉る。後刻号外発行。東都午前八時過ぎまで降雪。白皚々（がいがい）、午後消えたり。時変と天候何かの暗示とも認めらるるに似たり。湯浅内府興津の西園寺元老を訪ふて、一時間余密談後、継内閣の首班に付き協議、平沼男を押すものとの噂頻り。中尾氏、塩川の野口氏に手紙書く。小児保険に六ヶ月分前納に対し、半ヶ月分の割引あり。乃ち50銭、4銭切手12枚、2銭一枚にて同封送付す。今朝澄子買物にデパートに再び出掛け、岩田屋より錠蝶番四ヶ60銭にて求め来る。神様の扉の蝶番、破損したるを以てなり。福袋一円のを一個求め来る。中津に遣るらし、夕方雨歇む。此の夜平沼男に大命降下、男は塩野法相官邸を組閣本部とし、閣僚の選考に努む。

昭和14年1月5日（木）

朝来寒風、小雪ちらつき季節風強し。久子遅出、耳搔き貫ふ。二郎に手紙書く。八時道子澄子湯に行く際、投函方委託。手慄ゆる寒さ。今日閣僚の顔触れ決定、名簿捧呈、此夜親任式を行はせらる。澄子湯から販りにキンコウジ蜜柑七つ拾銭にて求め来る、一ヶ食す。

昭和14年1月6日（金）

曇り、七時近くまで久子寝て居る。余注意し其の儘出発。八時近くまで澄子寝て居る。道子買物に行き鯛を求め来る。三時頃より漸次霽れて来る。今朝零点下、手慄え箸を掴む能わず、寒入り。駒次宛て手紙、午後八時頃投函せんとしたるも、久子が風呂に行くと云ふので託することとせり。

昭和14年1月7日（土）

午前四時前より近所の子供等集まり、広場で喧噪、災神祭を催し居るものの如し。曇り、道子等外出、活動館らし。留守中神棚扉の修復を了す。剃刀磨く、五時より髯剃る。六時半細雨を冒して真の郷会に出席。若き学生二十余、村上、福田等中年以上の人々もあり。松尾氏より饅頭の寄贈あり、各五ヶづつ分配さる。先生より餡餅振舞はる。余興もありて賑やかなりし。十時閉会、十一時販宅。久子未だ販らず。土産の饅頭と蜜柑一ヶ持参。消防組員来たり寄附を要請す。恰度余のみ留守居して澄子等不在、四時頃来たれと立ち販らしむ。

昭和14年1月8日（日）

昨長谷川部隊戦地より帰還、勇士の面上喜色輝く。晴天なれど風強く寒し。久子休暇、十時頃外出せり。南面の障子開放。午後一時山崎氏を訪ふ。氏は一日より離床の由、但し床を別室に移し、目下用心して感冒を警戒しあり。此日各市場休業。松屋に至りトロロ昆布20を二個求む。四時に二分前電車に乗る、四時過ぎ帰着。松下ラジオに葉書出す。調度不良来診を乞ふ。此日天気好し、風寒く手凍ゆ。八時を過ぐる頃寢床。曇り止布20求む、眼鏡拭ひ布。

昭和14年1月9日（月）

時々晴れ。午前中ワイシャツ洗濯して貰ふ、夕方まで大体乾燥す。午後より松原氏に手紙出す。余程寒気緩和の傾向。郵便局より保険契約を薦めに来る。道子余の許に是れが答弁を促し来る。道子に断り方依頼す。間もなく販りたる如し。早く寝る。

昭和14年1月10日（火）

曇り、次第に降雨の様あり。午後一時四十分より仕度して駅に至り、中津行き回数券を購ふ、21, 85。正当と認めらる通行税は、片道の五倍とあり。次いで松下受信機出張所を訪ねて、事情を話し調節方に就いて懇談す。玉屋に至り事務服2, 95を求め、錠前20を求め、四時前バスにて販る。白エナメル19を塗料店より求め、洗面器修復取計らう。雨落ち初めしも歇み、終日降らず。澄子等毛糸にて赤坊の為に着物を造る、道子加勢す。午後六時澄子に理髪し貰ふ、次いで髯剃りす。久子販りココア一杯馳走になる。

昭和14年1月11日（水）

曇り、昨気象特報風強かるべしとあり、其の気配見えず。朝四十分発バス来たらず、電車に乗る。朝食意外に遅くなりたればなり。新聞求む。巖へ土産物甚だ多し。巖午後來局。光子嬢気の利かぬ例を挙げ当惑の色あり。荷物持行かしむ。此日入浴。今日で二日目、寝る前再び入浴。

昭和14年1月12日（木）

夜半より風強し、六時に光子起こす。床の間に国旗、両陛下額面、両側に総親和総努力、流汗鍛錬同胞相愛のびらを掲げ、荘嚴の氣溢る。余の不在中裝飾せし如し。午前七時、朝拝に定め、振り鈴を合図を一同集合、礼拝することとなしたり。九時に十分前出発、光子連れ立つ、袴新調、夫れを着用。此日午後一時中井ラジオ、中津局長、木下、保険郵便為替電信、各主事主任に挨拶送

り、保険為替にて質し、帰りに半紙50枚30?求めて帰局。新参の挨拶として60銭菓子、是永さんに求めしめ、五時より茶話会。餡入り餅菓子一ヶ食ふ、皮が硬くなり居たり。餅も悪くなりたる心地す。中尾氏より来翰。夕食後七時頃より腹部痒味、苦悶、次第に全身脹れ安眠し得ず。此の餡餅の中毒と認めたり。併し誰もが同じ症情を呈したるものなし。

昭和14年1月13日（金）

朝冷えたるも快晴。午後二時過ぎ中井ラジオ来たり間もなく去る。午後三時半鶴居局長臨局。保険五割増獲得の要ありと云ふ。此の夜風呂沸く、赤児を入れる。光子往き戻り一緒、途、分からぬと云ふ故。

昭和14年1月14日（土）

快晴、長洲局長松本氏より電話、バスに依頼託送せり、受取呉れとあり。停留所に居たりしに猶到着せず。少時俟つ間、十一時二十分到着。送料10銭800匁二円とあり。二包みとし上田谷地に送ることとし、残一斤程、余持販り、其の余りは塩川へ贈ることとし巖に通知。明日必ず小包発送せしむることとし、一切始末して午後一時二十分出発。此日は各列車共定時に発着、五時到着。次第に曇り、雨模様。家に帰れば降り初む。鯛求めあり、大蒜（おおねぎ）味噌も作成しあり。北野純一氏留守中来邸。気象技術員筆記試験に合格、二次試験は福岡に、而して合格せば技術員に転換の可否を質し来ると。

昭和14年1月15日（日）

朝冷氣、九時朝食を済まし髯を剃り、柳原先生邸に至り、

「まこと」誌第三種の認可申請書を作成。西神町局に至り、下の橋附近にて旗竿分を求め、下の橋を入り六本松より電車に乗り、一丁目より徒歩帰宅。夕食後秀夫宅に至る。待つこと少時、同僚新開氏と外出、間もなく販るべしと云ふ。間もなく販り来る。西津主事宛依頼状に就いて諒解を求め、七時半販る。今日は珍しき温暖、三月頃の気温、夜は遠（さす）がに冷ゆ。北野氏に返事を出す。柳原先生の同意をも聞き措置。

昭和14年1月16日（月）

此日も快晴、下帯洗濯、夕方まで乾燥す。中尾氏に手紙書く。峰氏より焼き海苔到着に付き礼状発送す。澄子甘蔗求め来たり、再び芋を食ふ。外出せず、夕方手紙投函に出たるに過ぎず。

昭和14年1月17日（火）

昨夜より曇り、降りそうな模様。午後一時より陸軍病院慰問托鉢。余行かず、此の日の奉仕者山崎氏息もありし由。便所掃除は大変、喜ばれたりとのこと。山崎氏寄贈の十五円内十円を、戦傷兵慰問に贈呈。午後五時より各三拾錢醸出。夕食星野先生邸にて。更に七時より夕の会。此日は出席者拾数名あり。余は七時より出発、至れば既に行事終われり。会費本日より60銭となり、光誌を会にて取纏め取寄せることとなる。即ち一人にて光誌二部配布され、一部は宣伝用に供するものとす。故に実際の会費は20銭に過ぎず。会計も補助一人附随することとなれり。猶来月より会日を第二土曜日に変更發議。此日から司会者松尾氏より指名、森、吉椿両氏。桑原氏の感話あり。誠誌に依る柳原先生の感想談ありて、十時半栗原氏の息、

水泳選手の優勝のコツに付いて質問あり。柳原先生、星野先生各専門的立場より解釈さる。十一時帰宅、降りそうで降らず。

昭和14年1月18日（水）

夜半より降雨、歇まず。昨朝早田氏に鉱石受信機注文して貰ふ積もりで手紙を認め、久子に話したるに、十一時まで出勤する筈故、往路立寄ること不可能、一時間午餐休みには髪など直さねばならぬから、だめと云ふから郵送にせり。今朝配達になりし如し。書洩らしたるが十五日柳原先生邸に赴く際、一丁目より城東橋区間にて野口氏妻女に偶然面接、咄す。時間がなく呆気なく分かれたり。雨は四時頃から時折歇みたるも、思ひ出した様に降り出す。三時過ぎ箕島局に行き、光友会の貯金をなし年金を受領し来る。道子夕食時寝て居る。熱は三十七度八分、風邪と称す。然るに七時頃久子と澄子湯に行く。其の後玄関に音なふ者あり。蚊の泣くように「お父さん」と云ふ。暫くして出て見る。酸素を持込む。余は人違えなるべしと云ふ。道子気を揉み注文せりと云ふ。呼吸困難の状態を目撃、大いに驚き布団を捲り上げ、早速吸入の準備をして貰ふ、3, 30銭。機具代損料1, 20、計4, 50, 多少楽になりし如し。熱が割合に少なく肺炎とは認められざるが幸ひなりし。九時四十分多少安神して寝る。

昭和14年1月19日（木）

松木君宛手紙を今日まで持越す。本日は久子遅出。まこと誌10部を年賀状の到着の向きに発送す。曇り、時々晴れ、多少寒くなる。今朝酸素更に一本持来す。要求もせぬに大概使用始めた者は数本を要する例なるに徴し、持

込めるものと認む。道子熱37度3分、大分減少す。九時階下に夕刊を読み、四十分二階に上がりニュースを聞かんとしたるに、電波感動せず。十時寢床。

昭和14年1月20日（金）

六時半久子を起こしたり。曇り晴れ半々。午後一時よりラジオをスピーカーと共に、バス電車にて相談所に持込む。一時間程待居る。四七真空缶不良と分かる。シャーシーを持戻り、再び真空管を購求すべく、上西町松下ラジオ製作出張所に行き、中津23?故障多き旨、中井ラジオ店主が申居りしこと、及び上級の機器と交換方を申入れたるが、同機は目下作成を中止し居るは事実なるも、感度鋭敏、故障続出の恐れあるごときものに非ず、機器を当方に持参あらば徹底的に調査整調して差し上ぐべき由、申出あり。真空缶は他の売店より購入せられたし、当方では売捌き居らずとのことに、川端に至りラジオ屋より求めんとしたるに、4,80円と云ふ。割引して4,30とあり。折悪く現金不足す。一旦家に販り夕餐を済まして、バス二区乗り川端町に至り、右四七真空管を求め、全区バスにて販る。七時半ニュースを終了。ラジオを調節す、不具合の点あり。久子夕方ミルクキャラメル一個態々持来る。道子次第に快方に向かひつつあり。後より持参の酸素不用となる。読書新聞より三冊注文の内、二冊送付越せり。道子快方に向かふ。猶日の出町ラジオ屋に至りたるも、47マツダ球なし。4,800銭と申したるに依り、川端町に出直したるものなり。此の日終日、稍に晴天、夕食珍しく御飯食す。

昭和14年1月21日（土）

此日より大寒に入る。朝の間日が射したるも午後よりは曇る。久子遅出。岡田光邦宛て手紙書き、之を携えて午後六時出発。新柳町より電車、予て約ある岩田屋九鉄待合所に至る時、六時三十分。久子よりポータブル蓄音器受取り、柳原先生に至る。出掛けに先立ち髯剃る。途中栗原氏と一緒にいる。集合僅か三名、静座して十五分間程、二三名見ゆ。最後に十名余になる。菓子を一袋ずつ頂く。島井氏工場より数名見ゆ。吉椿、森、栗原、余、光友会に出席組なり高瀬氏の外、若き女性も見ゆ。十時半閉会。第三種書式改正になりし由、見本交付、先生より認印借用して帰宅。十一時半寢床。

昭和14年1月22日（日）

曇り、賀状の返事拾数枚認め、改正書式に依る第三種認可申請書を作成、四時より山崎氏宅に至る。氏安眠し居られたる由にて面会せしめず。まこと一部不足を同氏より借用、提出せし積もりなりしを以て当惑せり。一旦武藤を訪ふ。緒方氏の許に遊びに行きたる由。同氏住宅附近は下水放流のコンクリート管を沈下しつつ道路を掘鑿（くっさく）しあり。漸く判明、何れにか兩人外出不在、少時して漸く判明。秀夫に頼み再び城西橋に柳原先生を訪ひ、見本として数部頂き引返し、再び秀夫に預け六時帰宅。夕食を済まして二階に上がれば、七時を過ぎたり。此の朝六時半、星野先生宅に至り、寒行を遣る二十一日より一週間継続すと云ふ。先生、栗原氏、其の他二名参加、星野先生も見ゆ。其の際、明日よりモラロジー講習会開始の旨、咄あり。今回は既に一週間休養の揚げ句とて、是れ以上休むわけに行かず、遺憾ながら断念せり。

其の代わり道子に聴かせんと思料したり。夕方是れを道子に談るに、異様の眼を光らせ沈黙、其の気配を察し澄子が弁解的に拒避的態度を採れり。余敢えて争はず。

昭和14年1月23日（月）

朝の行事に出勤せんとせしも、今日は中津への荷物があり、朝食を駅弁にすることも不経済の憾みありて躊躇する中、時刻は経過せり。朝食少し遅れ、遂に電車に乗る、割引中なり。中津への荷物中には、赤子の毛糸の襦袢足袋帽子の外、人形もあり。余の羽織も持行く。駅にて新聞紙を求めたるに、夕刊なき場合は四銭にて求められたるを、昨日より五銭に値上げさると。局では余の到着を承知し居り、湯を沸かし居れり。文書の到着なし、割合に滞りたるものなし。六時帰る。前日餅搗きせし由、三斗二升と聞こえし。此の夜餡餅を食ふ。昨日餡を作らざりしと云えば、余の為に特に作りしものと覚えたり。入浴。此日切手請求、永江氏、余出局当時不在。曇天なるも陽の射すこともありき。

昭和14年1月24日（火）

曇り、時々晴れ。野口氏可なり仕事を覚えたりと云ふ。煎り子は余の福岡に行きたる当日売りに来たり、相当購入せりと云ふ。一升35銭と云ふ。上田谷地にも発送せりと云ふ。野口氏余より先発、飯宅。夜の手伝いが肝腎なるを以ての謂と認む。入浴、猶寝る前にも入る。野口氏脚痛、入浴せず。

昭和14年1月25日（水）曇り晴れ半々。メンソレータム森下に調剤し貰ふ20銭。野口氏二十分前出発。勤債償

還20円、澄子のもの支払を受く。裏面受領証を不要。此の朝、巖炭俵と共に新しき米俵を焼いて、藁灰を作る目的らし。余風呂焼に使用せば経済的ならん、米俵に至りては用途に役立つを優れりとすべしと注意せり。愛子にも同様注意され、非常識に驚けり。野口氏履歴書認めるべく一時間以上を費やし、仕事を離れ永江氏の後ろ口の切手棚を机に、懸命に書き居り遂に完了せず。更に二時間余飯宅後費やし、猶完成に至らぬ如し。是れにも呆然たらざるを得ず。夕飯、餅を食す。

昭和14年1月26日（木）

給料午後到着、各員に支払を了す。野口氏二十日分拾円渡す。中尾氏来翰。曇天、時々晴れる。夜半腹少し痛む、下痢の徴あり。貯蓄債券60枚請求。中敬三氏臨局、同氏の長男中尉戦死、感状を得たる名誉を此の朝新聞に掲載あり。光子氏の蒲団類駅に到着しあり。巖夕食時の繁忙に加勢し駅に行く余裕なしとのこと、慫慂せざりし。拾円食費、外参円餅代、愛子受取らぬと云ふを強いて遣わす。風呂沸く、入浴。寝る前にも復た入る、十時寢床。

昭和14年1月27日（金）

朝晴れ、朝吹氏来邸、巖とカードの整理。夜半前夜同様、然も甚だ執拗、漸く定時を待つ。此日桑原氏より土曜日三十円払戻し呉れと葉書あり。切手請求葉書六千、巖に運搬委託、葉書発送、四時過ぎ配達し呉れたり。次いで駅に行き光子氏荷物のこと注意す。此日光子氏体格検査を相談所に托す、一時間余費やす。採用報告す、身元保証書巖に頼む。入浴、餅代八十五銭余に渡す。

昭和14年1月28日（土）

朝冷氣、下痢腹多少痛む、然も前日程でなし。快晴。巖餅七升、外に煎り子、青海苔等、局に持込み呉る、頗る重し。一時二十分出発、駅まで荷物を持たせると云ふを断る。バス停留所より家まで持参するに流汗淋漓たり。五時前到着。夕食例により餅、久子六時頃飯る。

昭和14年1月29日（日）

快晴、日中は暖かなり、午後二時頃より曇天となる。麴一枚、糯米一升求めさせ、此の夕糯米を炊かせ、堅造りとして製造、更に瓶に移して炬燵に置かしむ。静江氏より五円送金あり、家具も洋服も造らぬとあり。六級棒となりたる由（旧臘）、厚生省に転勤の噂ありと云ふ。三時頃より曇り。

昭和14年1月30日（月）

曇り、二時頃より晴れ、四時頃より再び曇り。北野氏父より熨斗餅三升程、四時頃送り越す。先日純一氏に対し注意したる余の意見を感謝したるものと認む。甘酒出来たり、之れを煮沸せしめ置けり。恰度一昼夜にて出来たるもの。静江氏より送金の五円返却す。手紙の内容、余の意に満たぬものあればなり。此の余の態度は果たして適切なるやは、余自らも疑問視す。

昭和14年1月31日（火）

曇り勝ちの天候、午前中は陽が多く照り榮ふ。今日新年御題披露。豊福喜一氏に返信出す。北野氏に煎り子送ることにし梱包したるも、筆書きの必要により、明日中津よ

り発送せんと思料す。髯剃る、甘酒三軒に配分す。向かいの家より団子を貰ひたるも、余り食べる者なし。珍しく気温暖かなり。久子遅出。桑原氏葉書の次第もありたるも、訪ねて来ても呉れぬ故、別段の措置を講ずることなく差掛けり。